

ドナウ通信

目 次

日本人会からのご連絡		2
大使館からのご連絡		2
補習校便り		3
作文 玉木聡志 玉木由佳 中西あずさ		4
<特集> 夏に想う		6
夏の思い出	志治由利子	6
私の夏休み	有光妃呂美	7
夏の風景: 黒と白	竹内 芳明	7
夏の出来事	長岡 恵	8
変わりゆく街に思う	瀬川知恵子	10
バラトンの別荘で過ごした夏	武井 弥生	11
憧れのヴァルナ	三木 朝子	13
掲示板		14



日本人会

からのご連絡

日本人会会員の皆様、御健勝のこと
と思ひます。

本年度も早くも上半期が過ぎ、ハン
ガリー日本人会として、いくつかの活
動を実行して参りました。

御既承の通り、本年度より日本人会
の活動は以下の責任部長の指揮の許に
企画、運営されております。

文 化 …… 高橋参事官 (大使館)

ス ポ ー ツ …… 早崎 所長 (三井物産)

レ ジ ャ ー …… 小石 所長 (日本電気)

ド ナ ウ 通 信 …… 盛田 教授 (野村総研)

一 般 …… 山地 教授

(ブダペスト大学)

事務・会計…酒井 由美子さん

各専任部長、並びに会員皆様方の御

協力により本年度も会員親睦の諸活動

が、活発に運営されることを念じてお

ります。

暑い夏を迎えますが、会員皆様方、

御健康に留意され益々ご活躍下さい。

1994年度

ハンガリー日本人会会長

古屋

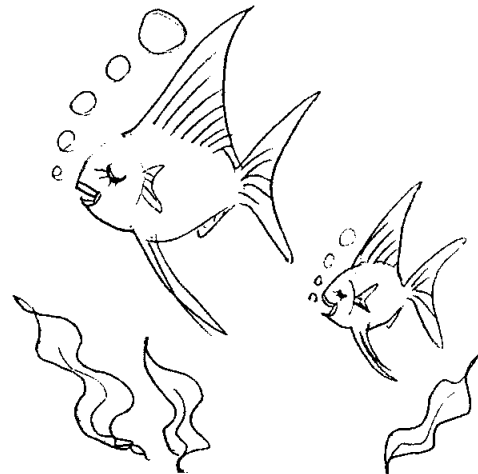


大使館より

UNICEF職員募集のお知らせ

UNICEFでは、1994年職員
募集をおこなっています。

詳しくは、大使館までお問い合わせ下
さい。



補習校便り

6月になってからも安定しない天気が続いてまいりましたが、やっと夏らしい汗ばむような暑い毎日になってきました。この解放感でいっぱいの時期になると、ちまたにはヴァカンス気分があふれ、夏休みに入った子供や学生が町を闊歩し、卒業試験のためセーラー服や背広を着込んだ高校生をよく見かけるようになります。

一方、補習校では「どうしてまだ勉強しないといけないんですか。」という声を聞き流し、今日も集中授業が続けられています。とはいももの、子供達もこのヴァラエティに富んだ授業形態をけっこう楽しんでるようです。普段の昼からの授業ではない日直の仕事や、図工・体育といった科目にも積極的に取り組んでいます。教える側としても昼からの授業では見ることのできない、子供達の午前中ならではのいきいきとした表情が嬉しくもあります。

さて、この集中授業で大きな位置を占める行事が運動会です。今年は補習校としての団体演技でフォークダンスをすることに、先日さっそく全校生徒で「マイム・マイム」を練習しました。実は団体競技を決める際、昨年の「竹馬ショー」に引き続いて、今年

は新たに日本から届いた一輪車で「一輪車ショー」をしようか、という大胆な意見も出たのです。しかし何といっても一輪車が届いて1カ月あまり、子供はともかく教員の方は一人として乗りこなせていない現状なので、今年は一輪車ショーは見送りと相成りました。代わって登場したのが、まずたいていの人が一度は踊ったことがあるはずの「マイム・マイム」です。小学一年生から中学生まで、でこぼこの円ではありましたが、「右、左、はいそこでびよん、もう一度繰り返す。」との指示に遅れまいと真剣な顔でステップを踏んでいました。

子供に受けていたのが「マイム・マイム・マイム・マイム、マイム・マイム・ベサソ」と歌いながら円の中心に向かって行き、つま先をちよんとつくところと「ヘイ、ヘイ、ヘイ」と言いながら隣と手を打ち合わせるところです。つま先を後ろでなく、「はないちもんめ」の要領で前に蹴り上げてしまう子供がいたり、「ヘイ」のかけ声がずいぶん野太い声になってしまったり、笑いが絶えませんでした。

ところで職員室で話題になったのが「マイム・マイム」の意味と、「マイム」を繰り返した後の「ベサソ」という箇所をかつてどう習ったか、ということ。意味は「水、水、水があつたよ」ということらしいのですが、面白かったのは、「エッサッサ」と習った。「という意見(ー)や、「ラララ、でごまかした。」という意見がけっこうあったことでした。ダンス自体がそう複雑でなくわかりやすいステップのものだけに、歌詞が明瞭でないということが一段と面白く感じられました。皆さんはどういう風に記憶されているのでしょうか。歌詞はともあれ、

当日は大勢の方にダンスに加わっていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

楽しかった国立はく物館

四年 玉木 聡志

五月二十一日学校活動日に工芸博物館と国立博物館に行きました。工芸博物館は長くいられなかったせいか、つまんなかったです。

国立博物館では、入ったところにおかんがおいでがありました。ふたはと中でわけていて、右はし八十cmぐらいあって、左はし四十cmぐらいでした。おへ進むと、正方形の太い大きな石があり、もようがきれいだなくあと思いましたが。なん秒か見ていると、全部色のついた石がこまかく切られて、正方形の大きな石にくっつけてあるということに気づきました。作るのが大変だ

ろうなぐと思いました。

上の階へ行って、ホームベースをたてに切ったような形のはたがありました。

次のへやへ進むと、はしのほうに小さな階だんがあったので上へあがるときれいなピアノがおいでありました。ピアノの上のほうは、台形でした。金色と黒がまざっていてもきれいでした。

気がついたらぼくと、りょうくんしかいませんでした。階だんをおりたら一、二、三年がいたので、
「四、五年はどこへ行った」と
きいたら

「王冠のどこ」
と言ったのでいそいでそのへやを出て階だんのところまできたら四、五年とあいました。そしてやっと王冠が見られました。

ある人は、
「あれはにせ物だ」
と言っている人は、

「あれは本物だ」

と言っていたので、あたまがこんがらがってしまいました。王冠だけではなく、しゃく、マント、つるぎがありました。このあと、工芸博物館に行つて学校にかえりました。

工芸博物館

四年 玉木 由佳

前の土曜日に工芸博物館へ行きました。たて物の形は、ちよっぴりへんではまっ白でした。置いてある物以外とくに柱、かべ、天井すべてがまっ白！昔の女のドレスのウエストはすごくきゅうくつそうでした。先生に聞くと昔の女の人はウエストをきゅうくつにした方が女らしい！ということだったので！ だからすぐにきぜつする、と聞きました。けっこんしきの時にきぜつしたらかっこわるいなく。もし馬にのつてきぜつしたら？

というふうに思いました。ぞぞっ！
なんて思っていると先生が、

「早く！」

と言ったので急ぎました。と中で名前をサインする本があったので記念にサインしました。絵を書いていると、

「早くしなさい！かえるわよ！」と言

われたのでまた急ぎました。まだ上の階があるのに時間がないと言われたのでざんねんでした。次はもっとゆっくり全部見たいです。

楽しい旅行

四年 中西 あずさ

先週、家族でプラハへ行きました。とてもしずかな町でした。近くに大きなおしろがあり、そこへ歩いて出かけました。

そのお城につくにはまだまだで、あとかいだんが30だんもあります。

お母さんは、

「もう、だめ！」

と言っていました。

わたしもとてもつかれていました。少し行った所に、休む所があったので、そこでジュースを飲みました。

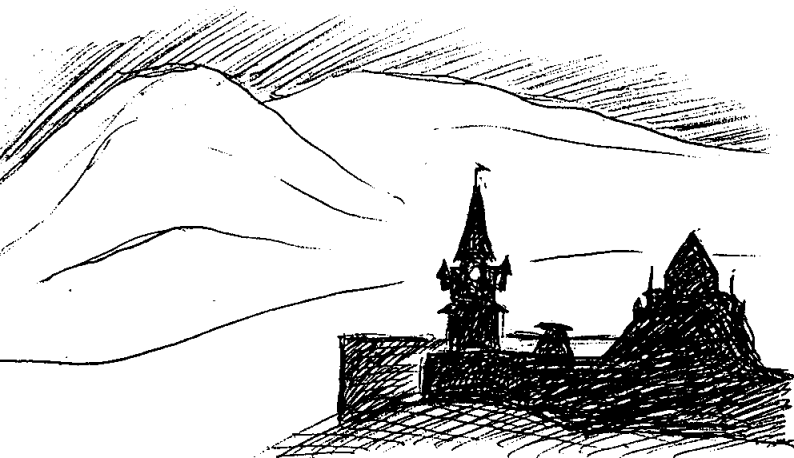
そして、やっとおしろにつききました。

おしろのそばでは、多くの人がわたしたちと同じようにおしろを見学にきています。わたしたちもどんどんおくへ行きました。そうすると、とてもすごい庭がありました。おしろには、びっしりとはりついたつたもありました。前にも日本で他の家がこのようにやっているのを見ましたが、あんなにすごいのは見たことありません。
あと、わたしは、すごい発見をしました。

へいの所に、四角の形で、そこだけあいていました。わたしはこれ、何だろう？と思って、お父さんに聞いてみました。そうすると、こんなふうに話してくれました。

「これは、せんそうをしているとき、てっぽうをうつのに、そこに、てっぽ

うを入れて、きにあたり、自分たちは、へいがまもってくれるんだよ。」と話してくれました。わたしは、これはただのまどだと最初は思っていたけどそういう役わりがあったのか……。と思いました。



夏に想う

夏の想い出

志治 由利子

ブダペストに来てハンガリーの人々の素朴な親切心に触れる度、想い出す夏の小さな出来事があります。

それはまだ私が幼い（確か小学一、二年生位）頃の夏のことです。家の前の道は、まだ砂利道で舗装されていませんでしたが、いよいよアスファルトの道路にするということで、数人の道路工事のおじさん達が汗だくになって作業をしておられました。

私はおじさん達の作業がとてもおもしろく感じられ、道端のアスファルトの黒いかすを運動靴のゴム底で踏んでその熱さを楽しんだり、手際の良い働きぶりを感心して眺めたりしておりましたが、突然家の中から母に呼ばれ、おつかいを頼まれました。何をかくそうこの私は「おつかい大好き人間」でありまして、「豆腐一丁でも良いから何かおつかいに行くことはないか」と母にねだる（？）ような子供でしたので、道路工事に心をひかれながらもやはり「おつかい」の魅力には勝てず、またその内容が、「大きいカップ（…）といっても三十年も前の事、僅か三十円）のアイスを六コと十円のを一コと聞くに及んでは、もう大喜びでおつかいに行ったのです。

も小さな方のカップをくれました。たったそれだけの事です。本当に、たったそれだけの事だったのですが、その時に子供心に思った、「母はいい人だなあ。」という想いが、反抗期、思春期と、大人になっていく上で、何か心によみがえり、反抗心をいだきつつも「母を大切にあげたい」という根本の気持ちにゆらぎはなかったのです。

大人（あるいは働いている人）には大きい方、子供は小さい方、という順番にも、今、私が子供を育てていく年になっても、何か教えられるところがあるような気がします。

お年よりや子供にとっても親切なハンガリーの人々、エンストした車を一生懸命押してあげる人々、（ごまかす人もいるにしろ）まちがって余分にお金を渡したとき、大声で呼び止めて返してくれるピアツのやおやさん…。ハンガリーのあたたかさに触れる度、想い出す小さな私の夏の想い出です。

私の夏休み

有光 妃呂美

早いもので、ハンガリーに赴任して今年で3度目の夏を迎えます。年々暑くなり体力を消耗しがちではありませんが、日が長くなり催し物の多い夏はまた1年のうちで1番楽しい季節ともいえます。今までの夏を振り返ると国外旅行や、週末に日帰りで地方をドライブして過ごし、日本人会の遠足でも普段なかなか出来ないさくらんぼ狩りとか、バラトン湖遊覧、バーベキュー、民族舞踊、ホース・ショー等ハンガリーならではの催しを楽しませて頂き、充実した日々を送ってきました。こんなに盛り沢山の事が出来るのは日本と

比べ時間的、精神的に余裕があることと、安く芸術やレジャー設備を楽しめる為だと思われれます。また、最近ハンガリーと日本の文化交流が盛んになってきましたので、ハンガリーにいなから生け花や歌舞伎のデモンストレーション、日本の音楽家による演奏等も見ることが出来ますが、日本にいると普段見過ごしてしまいがちなこうした催しも、ここにいると異なった視点から見ることになり、新鮮な感覚で楽しむことが出来ます。

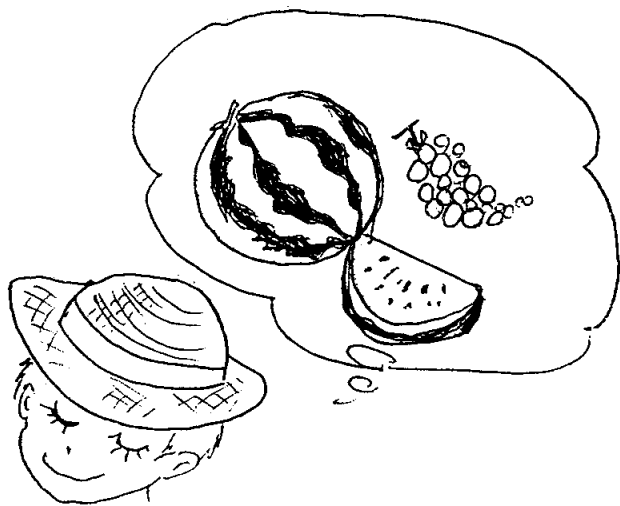
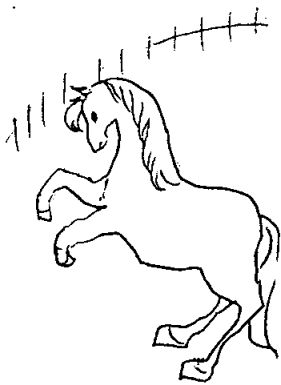
只、主人の任期が3年で、今年がハンガリー生活最後の夏になろうかと思えますので、後悔する事の無いよう精一杯ハンガリーの夏を満喫したいと考えており、今年の夏にはとりあえずマルギット野外劇場でバレエを観たり、8月20日の聖イシュトバンデーには花火を遊覧船から観ようと計画しております。正直なところもっと長くハンガリーに住み、素晴らしい夏を何度も過ごしたいと思う今日この頃です。

夏の風景…黒と白

竹内 芳明

私にとって、「夏」の思い出と言えば、尾瀬に咲き誇るニッコウキスゲではなく、真っ黒な顔をして冷えた白い麵を流し込むことじゃないかな。

思えばいつの頃からか、夏になれば



悪口を聞かされる羽目になった。今日をテレビ輸送の日にしたのも、選挙の結果をその目でしかと見届けるためだったのだろう。

彼女の夫は結婚して数年でこの世を去り、残りの人生を残された子供と二人きりで暮らしてきたという。「子供がいたし、再婚はしたくなかった。」と言ったときの、苦いような悲しいような表情を私は今でも覚えている。社会主義の70年は、そのまま彼女の苦勞の人生でもあったのだ。

私は大雨に降られたままだったのでシャワーを浴びに、すこしだけ失礼することにした。しばらくして電話があった。「友人からだな。」と思って耳をすましていると、間もなくジュジャがドアの向こうから「友人が今からこちらに向かうって言うからもう行くわね。セルプス！」と叫んでいるのが聞こえた。いったいテレビをどうやって下まで運ぶのだろう、と思って慌てて浴室を出ると、彼女が一人でテレビを

(！)ひょい！と持ち上げ玄関に向かうのが見えた。しば唾然としたが、「冗談でしょ」と思って再びあわててその後を追った。「そんなことをして腰でも悪くしたらどうするの?」「一人で大丈夫だから心配しないで。」と言った表情は注意深さに険しくなっていた。満身の力で筋ばった体がますます筋ばって腕はガクガクとビブラートしていた。ゆっくりと、けれど人を圧倒する迫力で、四階分の階段を降りようとしていた。下手に手を出すと本当に二人とも大けがしそうな危険な状況だった。私は頭にカーラーを巻いていたことを思いだし、途中で一端引き返して今度は本格的に手伝う意気込みでまた彼女を追いかけたが、そのときはもうすでに彼女はテレビを運び終わり、ガラス戸の向こうに立っていた。すごい!「手伝うって言ったのにイ。」と私が言うと、「髪が濡れたままで外に出ると風邪ひくわよ。」と言ってぱたんと戸を閉めてしまった。とても信じ

られないことだったが、彼女の方は全く平気なようだった。長い間一人でやらなければならぬことが多すぎて、テレビくらい何でもなかったのかもしれない。いつものことだが、彼女の強さ、明るさには胸を打たれる。

彼女のまわりには衣類をいれた箱やパブリカのものぞいた買い物袋、そしてテレビが、すでに大粒の雨に打たれて地ベタに置かれていた。「チャンピオン」と書かれたトレーナーにシオルターバッグをたすき掛けにした、妙に若いその後ろ姿は、「頑張れ」と応援したくなる姿だった。骨の折れた傘の裾からは次から次へと大きな滴が流れ落ちていたけれども、傘の下の彼女は、不思議と何者からも守られているような、そんな気がした。おそらく天国の旦那さんによって。

ずいぶん経ってキッチンの窓から下を見ると、ジュジャの姿はもうなかった。雨は止んだみたいで、ブダの丘には大きな虹が架かっていた。

悪口を聞かされる羽目になった。今日をテレビ輸送の日にしたのも、選挙の結果をその目でしかと見届けるためだったのだろう。

彼女の夫は結婚して数年でこの世を去り、残りの人生を残された子供と二人きりで暮らしてきたという。「子供がいたし、再婚はしたくなかった。」と言ったときの、苦いような悲しいような表情を私は今でも覚えている。社会主義の70年は、そのまま彼女の苦勞の人生でもあったのだ。

私は大雨に降られたままだったのでシャワーを浴びに、すこしだけ失礼することにした。しばらくして電話があった。「友人からだな。」と思って耳をすましていると、間もなくジュジャがドアの向こうから「友人が今からこちらに向かうって言うからもう行くわね。セルプス！」と叫んでいるのが聞こえた。いったいテレビをどうやって下まで運ぶのだろう、とと思って慌てて浴室を出ると、彼女が一人でテレビを

(！) ひょい！と持ち上げ玄関に向かうのが見えた。しば唾然としたが、「冗談でしょ」と思って再びあわててその後を追った。「そんなことをして腰でも悪くしたらどうするの?」「一人で大丈夫だから心配しないで。」と言った表情は注意深さに険しくなっていた。満身の力で筋ばった体がますます筋ばって腕はガクガクとビブラートしていた。ゆっくりと、けれど人を圧倒する迫力で、四階分の階段を降りようとしていた。下手に手を出すと本当に二人とも大けがしそうな危険な状況だった。私は頭にカーラーを巻いていたことを思いだし、途中で一端引き返して今度は本格的に手伝う意気込みでまた彼女を追いかけたが、そのときはもうすでに彼女はテレビを運び終わり、ガラス戸の向こうに立っていた。すごい！「手伝うって言ったのにイ。」と私が言うと、「髪が濡れたままで外に出ると風邪ひくわよ。」と言ってぱたんと戸を閉めてしまった。とても信じ

られないことだったが、彼女の方は全く平気なようだった。長い間一人でやらなければならぬことが多すぎて、テレビくらい何でもなかったのかもしれない。いつものことだが、彼女の強さ、明るさには胸を打たれる。

彼女のまわりには衣類をいれた箱やパブリカのものぞいた買い物袋、そしてテレビが、すでに大粒の雨に打たれて地べたに置かれていた。「チャンピオン」と書かれたトレーナーにシオルターバッグをたすき掛けにした、妙に若いその後ろ姿は、「頑張れ」と応援しなくなる姿だった。骨の折れた傘の裾からは次から次へと大きな滴が流れ落ちていたけれども、傘の下の彼女は、不思議と何者からも守られているような、そんな気がした。おそらく天国の旦那さんによって。

ずいぶん経ってキッチンの窓から下を見ると、ジュジャの姿はもうなかった。雨は止んだみたいで、ブダの丘には大きな虹が架かっていた。

ハンガリーの暑い暑い夏の訪れを告げる最初の一日はとても爽やかな日だった。

変わりゆく街に思う

瀬川 知恵子

母に書き送った手紙の一記にこんなものがある。

：ブダペストでは信じられないものが見当たりません。アルミフォイル、ゴミ袋、タバスコ、ナツメグ、洗髪後のコンディショナー、扇風機、プラスチック製のナイフ、ティッシュ・ボックス：

始めてハンガリーの夏を迎えた二年前の話である。第一印象は、『薄暗い街』だった。

市場ではジャガイモでもトマトでもブドウでも、ちりとりのような金属の入れものから手持ちの手下げ袋やかごに、無造作にどどとあけられるのでびっくりした。新鮮野菜を手にする楽

しみが動物のエサに成り下がってしまった気がしたのだ。

八百屋の店先には、およそ商品価値があるとは思えない半ば痛んだ野菜や果物が平然と並べられていた。

大通りに立ち並んだ物売りが「テシエーク！」と口々に客に声を掛ける。下着類まで大っぴらに開けてかかげられるには、こちらの方が気恥ずかしくなつて、足早に通り過ぎることもあった。

走る車の代表は、ソ連製のラダ、チエコ製のシュコダ、それに東ドイツ製のトラバントに決まっていた。トラバントの車体は紙だという専らのうわさが広がっていた。窓もナンパープレートも泥色一色の洗車形跡のない車を見掛けるのは珍しくなかった。

全く言葉を知らなかった当時、縄状のソーセージを「ハーフ・キロ」と注文したところ、相手の「ハット・キロ」の聞き返しに、うん、うん、うなずいて、とんでもない六キロのうず巻くソーセージの巨大パックを、泣きべそ

をかきながら、かかえて帰った苦い経験も思い出される。

それにしても、たった二年の間に、ブダペストの街は大きく変わってきている。

去年の夏オープンした米国系大型チェーンのファーストフード・レストランが話題を呼び、西側諸国からスーパー・マーケット、ファッション関係の店、車、ホテル、ガソリンスタンドなど、次々に進出してきて、旧体制下の街を一扫する勢いである。飾り付けがファッシュナブルになり、最新式のネオンの取り付けが始まり、街の美化にも力を入れられているようで、通りに立つ物売りの姿が少なくなった。光と看板と新しさで街はずいぶん明るくなった。

生活が便利になること、物が豊富になることは、確かにうれしいことではある。

一つの経済体制が崩壊して新たな世界が築かれようとする国の過程を目前にして、変化を肌で感じながら現地の

人々と共に喜び合えるのは、私達ブダペストに住む者の特権である。

しかし、一方ではインフレも深刻である。物価の上昇は激しく、週毎に値札を貼り変えるのだろうかと思うほどである。

相次いで開店する店が、一年足らずで消えてしまう例は少なくない。資本主義競争下の生き残りの厳しさからなのか、経営計画や見通しの不慣れな甘さのためなのか、考えさせられてしまう。

そして、外国店舗の急激な増加の現象に比べると、道路の整備の遅れや、古い建物の修繕の遅れ、国境や郵便局などの公共機関の窓口にも、英語を話すスタッフが一人もいないなどアンパランスの面が気になる。

費用の都合からであろうか、伝統の息づく古い街並に、不釣り合いな超近代ビルが、浮き出るように続々建てられ始めている現実も手放しでは喜べない。

あれもこれもと、西側諸国並みの近

代化に向けて表面であせているようにも見える。

息の長い将来を見込んで、ブダペストらしさを保ちながら地道な発展の仕方をしていってほしいものと思う。

さて、今年の夏には、どんな発見があるだろう。美しい街の散策を楽しみながら、変わりゆく『ドナウの真珠』の歩みを見ていきたい。

バラトンの別荘で過ごした夏

武井 弥生

早いもので私がハンガリーで夏を迎えるのも3度目となりました。その私がかつてハンガリーで始めての夏を迎えたときのお話です。私達が借りている家の大家さんのご両親からバラトン湖にある別荘に招待されたのは、1992年の夏のことでした。普段から週に1度家の掃除をお願いしていたので、子供達も含めて、私たちはハンガリーのおじいちゃん、おばあちゃんと呼んでい

ました。掃除以外にも買物の手伝いや、家の中の修理などよく助けていたでいていました。子供達もいつも大変可愛がってもらい、大好きでした。別荘への行き方は、地図を書いて何度も説明して下さいました。(説明は、ハンガリー語でしたが)

当日は大変暑い日でしたが、地図をたよりになんとかその小さなバラトン湖の街に辿り着くことができました。驚いたことに、おじいちゃんは、メイン道路に立って車をずうっと見ていてくださいました。予定より少し遅れたので心配になったのでしょうか、とても感動してしまいました。

その別荘は、ハンガリーの典型的な別荘で300坪ほどの庭とそのなかに15坪程の小さな家屋、そして小さな物置小屋からなっていました。ゆったりとした庭には美しく刈り込まれた芝が一面に生え、庭の一角には、トマト等の色々な種類の野菜のほか、杏、桃、林檎等の果物が植えられていました。家の中は決して広いとはいえませんが

2人の老夫婦が夏を過ごすのには、十分機能的で使いやすいように感じました。

おばあちゃんが食事をだしてくださるころには、私達はすっかりハンガリー人の気分でハンガリー語しか話せないおじいちゃんとおばあちゃん、ハンガリー語の話せない私達は、何故か言葉の障害を乗り越えてしまい、いろいろな会話を楽しました。そして自家製のワインをごちそうになりながら、ハンガリーの家庭料理を楽しくいただきました。

お肉のスープや、パプリカチキン、キュウリとトマトのサラダは、このレストランでたべた味もかなわないおばあちゃんの芸術作品でした。デザートは、庭でとれたチェリーでできた手作りケーキに自家製レモネードです。私達は、庭の一角に設けられたパラソルの下のテーブルに場所を移し優雅なティータイムです。子供達は、大きな庭で大喜びで走り回っています。その後、サマーベッドでお昼寝の時間と

なりました。

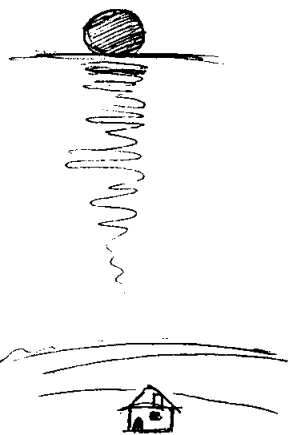
夕方近くになり、もう帰ろうかという時間になった頃に、となりの老夫婦も子供達の声を聞きつけて尋ねてきました。おじいちゃんがその昔、ハンガリーではとても有名なオペラ歌手で、何度も主役をとっていたことなど、とても驚くような発見もありました。最後におじいちゃんとおばあちゃんは、近所のきれいなアイスクリーム屋さんにつれていってくださいました。多くのハンガリー人にまじって私達は注目の的です。おじいちゃん、おばあちゃんは得意げに知り合いの人たちにいる人たちは、日本人の友人なんだ、と

いっているようでした。とって暖かいもてなしに、本当に私達の胸はあつくまりました。故郷の日本を遠く離れて、ハンガリーでこんなに素晴らしい人達に出会うことができて、とても幸せな気持ちになりました。帰路につく車の中で、車窓に写る夕日に輝く巴拉トン湖の湖面を見ながら、世界で有数の豊かな国、日本の現

実の姿と、経済的には貧しいと言われているハンガリーでのその日の経験を思い起こして私は考込んでしまいました。

さて、あの時お世話になったおじいちゃんも、今はこの世にはいません。あの夏の日の翌年、突然の心筋梗塞でこの世を去りました。私はその知らせを聞いたとき、まるで自分のおじいちゃんがなくなったことのように、涙がこぼれてとまりませんでした。今でも時々、夏の暑い最中に上半身裸で道路に出て、我が子を探すように待っていていたおじいちゃんの姿が目に見えます。

何十年か後、子供達が成人してからまたこのハンガリーを訪れ巴拉トン湖を家族と共にドライブしてみたいと思っております。



憧れのヴァルナ

三木 朝子

私達がブダペストにやってきたのは昨年(1937)の8月のこと。主人がハンガリーに駐在することになった時、私は少なからず嬉しく思いました。ブダペストにはオペラハウスがあったな、それにはヨーロッパもあちこち旅行でできるかなと思っただけです。学生時代からのあこがれの町ブラハ、カプリ島の青の洞窟、そしてブルガリアの保養地、ヴァルナこの三カ所はぜひとも訪れようと思心に決めてきました。昨夏、着いて早々にブラハを訪ね、冬場で洞窟に入れなかつたもののカプリ島まで足を運びそしてこの夏はヴァルナに行く筈でした。そう、この夏ヴァルナでは4年に一度の国際バレエコンクールが開かれるのです。三度の食事よりバレエが好き(ちょっと大げさ)私は自他ともに認めるバレエ狂。普通の公演にも増してコンクールが大好きなのです。近年数ある国際コンクールの中でも最

も伝統あるのがこのヴァルナです。日本を代表するバレリーナとなった森下洋子もこのヴァルナで金賞をとり世界的に認められました。

思えば二十年程前東京で初めて開かれた国際コンクールに毎日通いつめ、予選から決勝にいたる一部始終を見て私はその面白さを知りました。その時一位になったペアは既にポリシヨイ劇場(モスクワ)のソリストでしたが、どの作品も完璧に踊ったのがとても印象的でした。当時の外来バレエ団の公演が手抜きで、休暇で遊びに来ているような踊り手がいかに多いかに気付きました。コンクールは出場者の演技に緊張感があふれ、同じ演目が自ずと多くなるので踊り方を比べてみたり、又自分なりの採点をして審査結果と比較したりと楽しみはつきません。

今年1月幸運なことにこのブダペストでも国際バレエコンクールが開かれました。第一回ルドルフ・ヌレエフ記念国際バレエコンクールというのがそれです。なぜヌレエフなのかと思った

ら昨年亡くなった世界的名ダンサー、ヌレエフがダンサーとして最後の舞台にたったのがブダペストのオペラハウスだったということです。私がエルケル・オペラと毎晩通いつめたのは言うまでもありません。日本からも数名の参加者があり、その内女性一人が三位に入りました。一位はロシアとアメリカのペア二組、グランプリはデンマークの男性でしたが、地元ハンガリー勢ではアレシア・ポポウアが素晴らしい資質を見せ二位に入りました。彼女はこの6月「じゃじゃ馬慣らし」のタイトルロールに抜擢されています。コンクールでの成功がいかに重要かが分かります。

現在、ブダペストのオペラハウスでバレエ監督を務めるガボール・ケベハジ、芸術監督を務めるイルディコ・ポングル両名もかつてヴァルナで活躍した。その縁で日本にも何度か客演しています。地元、名古屋で以前に彼らの舞台を見ていたのでオペラハウスのパンフを見たときにはなんだか懐かしい気が

しました。

この7月、主人の仕事や、子供の学校、来客などで悪条件が重なり念願のヴァルナ行きは諦めざるを得なくなりました。こんなに近くてすぐにも行けそうな気がしていただけに、とても残念です。今回どんな新人が出てくるか今は結果を待つのみです。願わくばハンガリーから素晴らしいダンサーが出て、その凱旋公演でもあればいいのですが：（日本だとすぐその手の催しがあります。）

さて、四年後かというと、多分私達一家はブダペストを離れているでしょう。ヴァルナを訪れる時間的、金銭的余裕があるかどうか：？？ でもいつかきっと思う私です。

掲示板

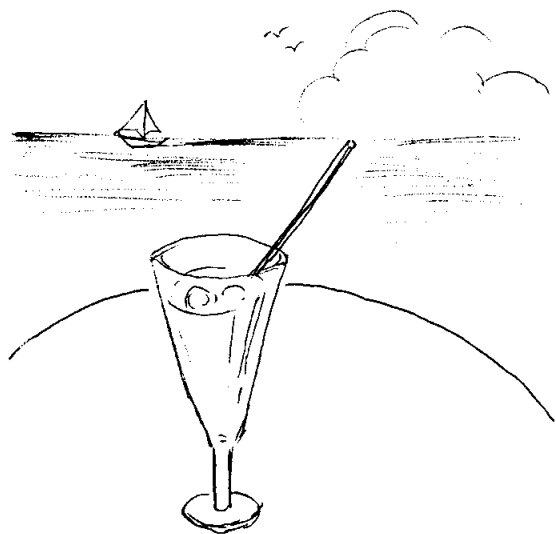
⊗滞在ビザの更新、車の登録・車検整備の代行、税関からの荷物の引き取りなど、役所の雑務を引き受ける人がいます。このような雑務の代行をお望みの方は編集室まで連絡ください。

⊗2区のロージャドンプに3DK（車庫付き）が空いています。

819万フォリントです。編集室までご連絡ください。

⊗スポーツマッサージ師が車で出張します。

連絡は佐藤まで（14911219）



編集室

皆様からの情報をお待ちしております。次回発行は10月初めです。

随筆、掲示板、お知らせなどお寄せください。

盛田 常夫

TEL/FAX 26614967